

「最後までとわかっていたらなら」

ノーマ・コーネット・マレック作

「最後までとわかっていたらなら」から

今年七月、熊本県を中心に、九州地方に大雨が降った。たくさんの方が亡くなり、行方不明になった。そのニュースを見て、母が私に貸してくれたのがこの本だった。「最後までとわかっていたらなら」、愛していると伝えただろう。もう一度抱きしめただろう。本にはそう書いてあった。私はこの言葉を読んで、涙が出そうになった。そして、誰にでも「明日」が来るわけではないということを感じた。九州を襲った豪雨のように、私たちから「明日」を奪う災害はいつでも起こりえる。だから私は、大切な家族や友達といられる「今日」を、後悔のないように生きていこうと思った。もう二度とは来ない「今日」を、大切にしていきたい。

受賞にあたって

読書家の母は、ふとした時に、本を紹介してくれます。純文学や元気の出る名言集だったこともありますが、今回はこの「最後までとわかっていたらなら」でした。急に家族を亡くした詩人のことばは、1ページ1ページに少なかったけれど、その後悔や悲しみが伝わってきて、思わず泣きそうになりました。この本を読んでから、病院で働く父も、いつコロナにかかるかもわからないと、より実感するようになりました。学校に行く時に、母親の手を握ったり、父が休日に出勤する時に「気をつけて、行ってらっしゃい」と言ったり。いま接している人と話せる時間を、大切にしたいと思うようになりました。

出典

「最後までとわかっていたらなら」ノーマ・コーネット・マレック作、佐川睦訳
サンクチュアリ出版